

歐陽脩書簡に見られる季節の挨拶をめぐって

東, 英寿

九州大学大学院比較社会文化研究院文化空間部門 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1560268>

出版情報 : 地球社会統合科学. 22 (2), pp.15-23, 2015-12-25. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン :
権利関係 :

論文

歐陽脩書簡に見られる季節の挨拶をめぐって

Seasonal Words of Greeting Observed in the Letters of Ouyang Xiu

2015年9月30日提出, 2015年10月26日受理

東 英 寿

Hidetoshi HIGASHI

キーワード: 歐陽脩、書簡、歐陽脩新発見書簡、『居士集』、『居士外集』、季節

一、はじめに

北宋の歐陽脩(一〇〇七～七二)には、植物や樹木を読み込んだ作が多い。たとえば「辨甘菊説」(『筆説』(1))、「希直堂東手種菊花十月始開」(『居士集』卷三)には菊花、「四月九日幽谷見緋桃盛開」(『居士集』卷三)、「小桃」(『居士集』卷十二)には桃花、「荷花賦」(『居士外集』卷八)、「荷葉」(『居士外集』卷六、七)には荷花、「鎮陽殘杏」(『居士集』卷二)、「和梅聖俞杏花」(『居士外集』卷六)には杏花、「榴花」(『居士外集』卷五)、「西湖石榴盛開」(『居士外集』卷八)には石榴花、他にも梅や芙蓉、檜、楠、松、柳、竹等、多くの草花や樹木が彼の作には読み込まれている。

とりわけ牡丹については強い愛着があるようで、「洛陽牡丹圖」(『居士集』卷二)、「謝觀文王尚書惠西京牡丹」(『居士集』卷七)、「答西京王尚書寄牡丹」(『居士集』卷十三)、「禁中見 紅牡丹」(『居士集』卷十三)等があり、なかでも「洛陽牡丹記」(『居士外集』卷二十二)三卷は、牡丹の各品種や栽培方法について書かれた専門書と言ってよい。その「風俗記」に次のような記述がある。

春初時、洛人於壽安山斷小栽子。……接時須用社後重陽前。……澆花亦有時。或用日未出、或日西時。九月旬日一澆、十月十一月二日一澆、正月隔日一澆、二月一日一澆、此澆花之法也。

春の初めの時、洛人は壽安山に小さき栽子を斷つ。……接ぐ時は須らく社後重陽の前を用ふべし。……花に澆ぐに亦た時有り。或ひは日未だ出でざ

る、或ひは日西の時に用ふ。九月は旬日に一たび澆ぎ、十月十一月は二日に一たび澆ぎ、正月は隔日に一たび澆ぎ、二月は一日に一たび澆ぐ、此れ花に澆ぐの法なり。

春の初めに、洛陽では牡丹の苗木を切り出し、牡丹の接ぎ木は春の社日の後から重陽の前までがよく、一日のうち水をやるのは日の出前か日の入り前がよく、更に水をやるのは、九月は十日に一回、十月、十一月は二日おきに一度、正月は一日おき、二月は毎日というように、牡丹の栽培を季節の移り変わりに従って記録しているのがわかる。歐陽脩は植物や樹木に関心があるので、月日の移り変わりや季節の変化にも留意していたのであろう。

他にも「初寒」(『居士集』卷六)、「秋陰」(『居士集』卷十四)、「霜」(『居士外集』卷七)等の気候や天候を読み込んだ詩があり、特に雪について詠んだ詩は数多く、「詠雪」(『居士集』卷十一)、「春雪」(『居士集』卷十二)、「對雪十韻」(『居士外集』卷十三)、「雪晴」(『居士外集』卷四)、「雪」(『居士外集』卷四)、「喜雪示徐生」(『居士外集』卷三)等がある。歐陽脩は、このように天候、気候や季節の移り変わりをしばしば自己の詩や文章に書き込むが、同じように彼の書簡の中にも季節や天候等について具体的に書き込むことが多い。

ところで、筆者は2011年にこれまで全く知られていなかった歐陽脩の書簡九十六篇を発見した。これらの書簡は偶然が重なりこれまで発見されてこなかったものであり、今日まで知られていた他の歐陽脩の書簡と全集に収録される過程は異っていたが(2)、同じ歐陽脩の書簡なので、書簡を考察する際にそれらを特に区別する必要は

ないであろう。そこで、本稿では新発見書簡と従来の書簡とを合わせて考察対象とし、歐陽脩の書簡に季節の挨拶や天候、気候等がどのように記されているのかを手がかりとして、彼自身が編纂した『居士集』に収録されている書簡を考察して、彼の書簡に対する意識を明らかにしたいと考える。

二、宋代当時の書簡

歐陽脩の書簡は、『居士集』に十篇、『居士外集』に四十六篇、『書簡』に四百七十二篇が収録され、更に筆者が発見した書簡として九十六篇（新発見書簡）が存在している(3)。これら六百二十四篇のうち、たとえば新発見書簡四十五「與蔡忠惠公」の冒頭は「脩啓。氣候不常，動履何若」であり、氣候は不順ですが、いかがお過ごしですかという書き出しである。このように書簡において氣候や季節の挨拶を述べて書き始めることは現在でもよくあるが、それでは宋代当時の書簡の書き方はどのようなものだったのかということについて確認しておきたい。

中国で最も古い日用百科全書だと言われる、元の泰定元年（一三二四）に刊行された『啓劄青錢』巻一に、宋代の正式な書簡の書き方が掲載されている。

「手書一幅正式」

一具札、二呼稱、三敘別、四瞻仰、五即日、六時令、七伏惟、八燕居、九神相、十尊候、十一托庇、十二入事、十三未見、十四祝頌、十五不宣

金文京氏の『漢文と東アジア—訓読の文化圏』によれば「①具札（初めのあいさつ）②呼稱（相手の呼称）③敘別（無沙汰のあいさつ）④瞻仰（相手への思慕）⑤即日（季節のあいさつの導入）⑥時令（季節のあいさつ）⑦伏惟（8以下への導入）⑧燕居（相手の日常の描写）⑨神相（神に加護）⑩尊候（相手の健康への配慮）⑪托庇（相手のおかげで息災であることへの礼）これだけの前置きをして⑫入事（本題の用件）となり、最後は⑬未見（会えないことへの遺憾）、⑭祝頌（相手の健康の祈願）、⑮不宣（結び）でようやく終わる」ということである(4)。『啓劄青錢』は元代に刊行されているが、引用されているのが唐代の資料なので、宋代にはすでに編纂されていたと推測されている。季節の挨拶に関連するのは、導入である「即日」、そして季節の挨拶である「時令」であり、書簡に季節の挨拶を記述することは、当時の書き方の一つの方法であったことがわかる。

確かにこれが正式な宋代の書簡の書き方であったのであろうが、こうした格式張った書簡以外に、歐陽脩は「與

富文忠公」(『書簡』巻一)の中で、書簡について次のように述べている(5)。

謂書者、雖於交朋間不以疏數爲厚薄、然既不得羣居相笑語盡心、有此猶足以通相思、知動靜、是不可忽。苟不能具寸紙、數行亦可。易致則可頻致、猶勝都不致也。

書と謂ふ者は、交朋の間に於て疏數を以て厚薄と爲さずと雖も、然れども既に羣居して相笑語し心を盡くすを得ざれば、此れ有らば猶ほ以て相思を通じ、動靜を知るに足る、是れ忽にすべからず。苟も寸紙を具ふ能はざれば、數行も亦た可なり。致し易ければ則ち頻りに致すべく、猶ほ都て致さざるには勝れるなり。

歐陽脩は富弼に送った書簡において、書簡は思いを通じさせ動靜を知らせるもので数行でもよいと述べており、これは『啓劄青錢』に掲載されていた書簡の形式とは全く対照的である。当時の書簡は格式張ったものから、ここで歐陽脩が言う個人的な些細なやりとりを記したもので多様な形式があったと考えられる。

三、書簡における季節の挨拶

さて、『歐陽文忠公集』所収の『書簡』四百七十二篇から、試みに季節や天候等の記載を列挙してみると以下のようになる。

(書簡巻1)

仲秋漸涼、冬序極寒、季冬極寒、歲暮晴和、冬寒、冬候凝寒、秋暑尚繁、霜寒、秋暑、餘暑尚繁、日夕風凜、早暮遂涼、氣節遂爾寒凝、冬序始寒、暑雨、春候暄冷。

(書簡巻2)

孟春猶寒、仲夏毒熱、猛秋猶熱、季冬極寒、晴陰不常、大暑、秋寒以來、夏熱、秋氣稍涼、秋涼、經寒、經暑、秋暑尚繁、酷暑、餘寒體氣清佳、頓涼、秋暑、仲秋漸涼。

(書簡巻3)

初夏已熱、今夏暑毒非常、秋雨早寒、冬寒、春寒、經暑涉秋、秋寒、秋暑猶盛、仲夏炎毒。

(書簡巻4)

初涼、經寒、經夏涉秋、夏熱、春寒、自春氣候不常、初暑、經暑。

(書簡卷5)

嚴寒、暖甚、餘寒頗甚、春候猶寒、經暑、經寒、春氣暄和、經暑、經寒、春暄、窮冬、窮臘陰雪、氣候已寒、霜氣清冷、以立秋日卜秋暑多少、冬凜外體氣清和、涉夏秋體氣清適暑雨爲孽、寒凝、秋冷、漸寒。

(書簡卷6)

酷暑如此、經夏大暑、陰雪不止、春寒、雪寒如此、大熱甚於湯火之烈兩日差涼、陰雨累旬、夕寒色尤盛、快晴、雨不止、經節陰雨。

(書簡卷7)

三兩日毒暑尤甚、春暄、暑候已深、經春體氣清裕、春寒、寒凝、陰雨泥甚、稍涼、數日大熱、稍寒、酷熱中體氣清安、遽爾大熱、大熱。

(書簡卷8)

春寒、夏熱、夏暑毒、陰寒、暑毒、大雨連綿、經寒、過午遂熱、秋暑、寒來、酷暑、經寒。

(書簡卷9)

自夏涉秋今條冬矣、今夏京師大熱、近以雨水爲患、陰雪、春夏之交氣候不常、秋暑、冒大熱、經寒、又值雪寒、時熱、酷暑、數日大熱、經寒、春寒、經此暑毒、秋暑、春和氣體清裕、春氣尚寒、秋寒、秋冷、春首餘寒。

(書簡卷10)

邇來暑熱、大風微雨。

季節や氣候、天気、あるいはその移り変わり等の自然状況が、しばしば書簡に記述されている。こうした季節の移り変わりや氣候、天候を書簡に書き込むのは、書簡の挨拶形式の一つとしての側面もあったであろうし、更に前述した如く歐陽脩が樹木や植物等に興味があり、自然や天候に関心があったことも関連しているであろう。その他に、歐陽脩の健康や体調との関連も見逃せない。たとえば、新発見書簡二十八「與呂正獻公」の全文は次のようである。

脩啓。佳雪可喜，寒中伏承臺候萬福。辱手誨，欲枉旌騎訪戴之事，數百年未有繼者，曷勝爲幸。第以泥濘，重有勞動，茲又慄愧也。人還，布謝，不悉。脩再拜知府侍讀侍郎執事。十日謹空。

脩十餘日左車牙痛，一兩日方能常食，滴酒不曾入口，寒中甚苦之，惟幸免酒也。惶恐惶恐。

ここは冒頭で「脩申し上げます。美しい雪は喜ぶべきで、寒い中、あなた様はご清祥のことと存じます」と書き出し、「手紙をかたじけなくも頂き、わざわざ訪ねられようとしたことは、数百年來このようなことをなさる方はいません。私は何と幸せなことでしょう。ただ、どろ道の中、体を動かされてやってこられたことに、ここにまたはじおそれます。人が還りますので、謝意を述べます」と記述した後に、「脩はここ十日余、左のあご骨、歯が痛み、ここ一兩日ようやく食べることが出来るようになりましたが、一滴の酒も口に入れていません、寒中に甚だ苦しんでいます。ただ、幸いに（これで）酒を免れることが出来ます」として、ここ十日余りあごや歯が痛み、寒さによって甚だ苦しんでいることを追伸として記述している。寒いという氣候が彼の身体に直接影響を与えていたことが明白に窺われる。その他にも書簡の中には、季節や氣候と関連させて身体の調子を書き込むことが多い。たとえば嘉祐二年の「與吳正肅公」(『書簡』卷二)は次のようである。

酷暑中、承氣體清適。某自初旬内、嘗冒熱赴宿、爲暑毒所傷、絶然飲不得、加以腹疾時時作。

酷暑の中、氣體の清適を承る。某、初旬の内より、嘗て熱さを冒し宿に赴き、暑毒の傷くる所と爲る、絶然として飲するを得ず、加ふるに腹疾を以て時時作る。

暑さを冒して宿に赴いたことが原因で身体が疲労してしまい、飲むことが出来ないようになり、その上腹痛を起こしたことを述べる。暑いという氣候を書き込むことによって、それに関連して自らの身体の不調へと記述が展開しているのである。一方、氣候の変化で身体が良くなったという記述もある。たとえば、嘉祐二年に呉奎に送った別の書簡「與吳正肅公」(『書簡』卷二)では、「頓涼。伏計德履康裕。某病體得涼漸愈」として、急に涼しくなったことが影響して、歐陽脩は体調が良くなったと記述しており、ここでも氣候と身体の変化が密接に関連している。また、嘉祐四年の「與趙康靖公」(『書簡』卷三)では、今年の夏は非常に暑いとして「乃以今夏暑毒非常歲之比」と記載した後に、

壯者皆苦不堪。況早衰多病者可知。自盛暑中忽得喘疾。

壯者も皆な苦しみ堪へず。況んや早衰多病の者は知るべし。盛暑の中より忽ち喘疾を得たり。

元気な者も苦しんで堪えきれないが、まして病気がちの歐陽脩にはこたえたようで、突然喘息の症状を発症したと述べる。喘息については、呉充に送った『新発見書簡』二「與呂正獻公」の中でも、「脩啓、以經夏涉秋雨、喘加以痰毒、風眩」として、夏を経て秋になり、雨がふり咳がでてきて、それに加えて痰毒風眩となったと記述し、秋雨が続く気候によって、喘息が起こり、しかも痰がでて立ちくらみが出るなど症状を悪化させていることが窺える。ここは、身体の調子が悪化したことを記述するために、その原因として自然や気候の変化を書きこんだと言えるだろう。更に、梅堯臣に与えた皇祐五年の書簡「與梅聖俞」(『書簡』卷六)には、「自春陰寒少晴明、病體不勝疲勞」として、寒さは病気がちの身体にはこたえることを記述し、熙寧五年作の「與薛少卿」(『書簡』卷九)では「又值雪寒、難於舉動、加之病齒妨飲」として、雪の寒さの中、行動することが難儀で、それに加えて歯が痛み飲食を妨げると記述する。

このように、季節の挨拶や天候、あるいはその移り変わり等が歐陽脩の体調とともに書簡に書き込まれることは多い。歐陽脩は若いときから身体が丈夫でなかったようで、特に晩年は糖尿病を患い、眼疾や歯の疾患、手足の疾患で非常に苦しんでいる(6)。従って、季節の移り変わりや気候の変化が直接体調に影響を及ぼしたであろうし、逆に病気のために季節の移り変わりを感じやすかったという側面もあるであろう。かくの如く、季節や天候と体調とは密接に影響していたので、書簡の中で自分の様子を相手に伝える際に、季節や天候等の自然現象がしばしば書き込まれたと言えるであろう。

四、『居士集』所収の書簡

このように歐陽脩は季節や天候等をしばしば書簡に書き込んでいるが、しかし歐陽脩の全集『歐陽文忠公集』巻一から巻五十を構成する『居士集』に収録されている書簡八篇には(7)、実はこうした記載が全く見られない。たとえば、季節の挨拶や気候等が書き込まれることが多い冒頭部分を列举してみると次のようになる。

「答陝西安撫使范龍圖辭辟命書」

脩頓首再拜啓。急脚至、得七月十九日華州所發書。伏審即日尊體動止萬福。夷狄侵邊、自古常事、邊吏無狀、至煩大賢。伏惟執事忠義之節、信於天下。……

「答李詔第一書」

脩白、人至辱書及性詮三篇、曰以質其果是。夫自信篤者、無所待於人、有質於人者、自疑者也。……

「答李詔第二書」

脩白、前辱示書及性詮三篇、見吾子好學善辯、而文能盡其意之詳。今世之言性者多矣。……

「與荆南樂秀才書」

脩頓首白秀才足下。前者舟行往來、屢辱見過。又辱以所業一編先之、啓事及門而贊。……

「答吳充秀才書」

脩頓首白先輩吳君足下、前辱示書及文三篇。發而讀之、浩乎若千萬言之多、及少定而視焉。……

「上杜中丞論舉官書」

具官脩謹齋沐拜書中丞執事。脩前伏見舉南京留守推官石介爲主簿、近者聞介以上書論赦被罷……

「舉曾鞏論氏族書」

脩白所僻遠、不與人通、辱遣專人惠書、甚勤、豈勝媿也。示及見託撰次碑文事。……

「答宋咸書」

脩頓首白、州人至、蒙惠書及補注周易、甚善。世無孔子久矣。……

このように『居士集』に収録された書簡八篇は、季節や気候の状況が記述されずに、直接本題に入る。しかも、書簡の本文中、如何なる箇所においても季節や気候等の自然状況に言及することはない。これはどういうことを意味しているのだろうか。

それを考える手がかりとして、まず『居士集』の編纂過程を確認したい。そもそも、歐陽脩の全集『歐陽文忠公集』百五十三卷は、南宋の周必大が、孫謙益、丁朝佐、曾三異、胡柯らの協力を仰いで紹熙二年(一一九一)から慶元二年(一一九六)までの六年の歳月をかけて編纂した。この『歐陽文忠公集』百五十三卷の巻一～巻五十を構成する詩文集が『居士集』である。参考までに『歐陽文忠公集』百五十三卷の構成をあげると以下の通りである。

『居士集』五十卷、『居士外集』二十五卷、『易童子問』三卷、『外制集』三卷、『内制集』八卷、『表奏書啓四六集』七卷、『奏議集』十八卷、『雜著述』十九卷、『集古録跋尾』十卷、『書簡』十卷。

このうち『居士集』五十巻部分だけは、歐陽脩自らが編纂をしていた。たとえば、次に挙げる『文献通考』巻二百三十四、經籍考六十一の記事には、葉夢得の言葉を引いて次のように述べる。

石林葉氏曰、歐陽文忠公晩年取平生所爲文、自編次。今所謂居士集者、往往一篇至數十過、有累日去取不能決者。

石林葉氏曰く、歐陽文忠公は晩年に平生爲る所の文を取りて、自ら編次す。今の所謂居士集は、往往にして一篇は數十過するに至るも、累日去取の決する能はざる者有り。

ここから、歐陽脩が晩年に自己の作品を何度も読み返し苦心して『居士集』を編次していたことが窺える。また、周必大も「歐陽文忠公集後序」(『平園續稿』巻十二)において次の如く記述する。

惟居士集經公決擇、篇目素定。而參校衆本、有增損其辭至百字者。有移易後章爲前章者。皆已附注其下。

惟だ居士集のみ公の決擇を經、篇目は素より定まれば。而るに衆本を參校すれば、其の辭を増損すること百字に至る者有り。後章を移易して前章と爲す者有り。皆已に其の下に附注す。

『居士集』五十巻は歐陽脩により篇目が決定されていたこと、更に『居士集』に収録するに当たり、歐陽脩が自らの作に多くの修正を行っていたことがわかる。

『居士集』の書簡八篇は「書簡」と題されており、これは歐陽脩が「書簡」という篇目を定めて、自己の数多くの書簡の中から、『居士集』に収録するにふさわしい書簡を選別したことを意味している。もちろん、『居士集』に収録されたこれらの書簡には当初から季節の挨拶や気候の状況を書いていなかった可能性もあろう。ただ、『居士集』に書簡として収録した作の全てに季節や気候への言及がないということは、前述した如く他の多くの書簡に季節や気候の移り変わりを書き込んだ歐陽脩にとって、いささか奇異に感じられる。

そこで、『居士集』にどのような内容の書簡が収録されたのかということを考えたい。それを考える手がかりとして、周必大らの『歐陽文忠公集』百五十三巻の編纂過程に注目したい。周必大らは、全集百五十三巻の編纂に当たり、前掲した全集を構成する詩文集のうち新たに

『居士外集』と『書簡』という部立てを設けた。(ちなみに、それら以外の詩文集は、歐陽脩家に残された梓組みを利用して(8))。『居士外集』とは、歐陽脩が編纂した『居士集』の外集と位置づけられる部立てであり、『書簡』とは当然ながら書簡を収録する部立てである。歐陽脩家に残された資料に加えて、種々の資料から見つけ出した書簡を、周必大らは全集を編纂する際に『書簡』部分に収録しようとしたが、『書簡』巻十の最後に附された周必大らの校勘において次のように記述するのは注目される。

吉綿本書簡有論文史問古事之類、移入外集第十六十七八十九巻中。

吉綿本の書簡に文史を論じ古事を問ふの類有り、外集の第十六、十七、十八、十九の巻中に移入す。

この校勘は、周必大らが見つけ出した資料の一つである吉綿本において、書簡に分類されていた作の幾つかを、全集を編纂する際に『居士外集』に移したという指摘である。その判断の基準として、書簡の内容から周必大らは「文史を論じ、古事を問ふ」をあげ、そうした内容を持つ書簡を『居士外集』に移したと述べる。

部立ての名称から明らかな如く、周必大らは歐陽脩が編定した『居士集』に倣って『居士外集』を編纂したのであり、つまり周必大らは歐陽脩の『居士集』に収録されている書簡は「文史を論じ、古事を問ふ」内容だと認識していたと考えられるのである。そうであるが故に、彼らも『居士外集』を編纂する際に、歐陽脩と同じくそうした内容を持つ書簡を全集の『書簡』部分ではなく『居士外集』に移して収録したのではないだろうか。「文史を論じ、古事を問ふ」内容とは、日常の些細な出来事を述べるのではなく、自らの見解や意見を述べるもので、いわば一つの「作品」と言える内容を持つものであろう。

前述した如く『居士集』を編定する際に、歐陽脩は自らの作を修正して収録していた。とすれば、書簡を『居士集』に収録する際にも修正を加えることもあったであろう。「文史を論じ、古事を問ふ」内容となるように、歐陽脩が書簡の文章や表現を修正したことは十分に考えられるのである。

事実、歐陽脩は書簡にしばしば修正を加えている。たとえば『歐陽文忠公集』の『書簡』に収録されている劉敞に送った「又(與劉侍讀)其二十六」に着目したい。全文は以下の通りである。

某啓。賈常行、嘗附狀。辱書、承經暑動履康和。兼

蒙惠以韓城鼎銘及漢博山槃記、二者實爲奇物。某集錄前古遺文、往往得人之難得、自三代以來、莫不皆有、獨無前漢時字、每以爲恨。今遽獲斯銘、遂大償其素願、其爲感幸、自宜如何。屬患膝瘡、家居絕客、無人爲識古文。故第於郵中粗報已受二銘之賜、篆書當徐訪博識尋繹、續得附致。其餘區區、萬不述一、大熱慎護、以副瞻勤。清水安能久滯耶、實負愧也。

これに対して、同じく劉敞に送った、次の「新発見書簡四十二與劉侍讀」を確認したい。

新発見書簡四十二與劉侍讀 見履常齋石刻
脩啓。近賈常行、曾致拙問。辱書、承經暑動履清勝、少慰瞻勤。兼蒙惠以韓城鼎銘、蓮勺博山槃記、不意頓得此二佳物。脩所集錄前古遺蹟、自三代以來、往往有之、獨無前漢時字、常以爲恨。今遽獲斯銘、遂大償素願、乃萬金之賜也。屬患(膝)瘡數日、家居絕客、無人爲辨古文、當徐訪博學者識之、續錄寄上。今且於郵中致此粗報、已獲佳貺爾。今歲大熱、疲病尤覺難支。西州高爽、更冀慎護、以副區區、不宣。脩再拜原甫安撫學士坐前。廿一日 謹空。

これらの書簡は、長年欲していた漢代の遺物を入手した歐陽脩が、その送り主である劉敞に感謝を述べたもので、今は膝の病気のため詳しくは考察できないが、詳しいことが明らかになれば連絡をするということが書かれており、ほぼ同じ内容で同一の書簡だと思われる。

実はこれら二通の書簡は、最初に『書簡』収録の「又(與劉侍讀)其二十六」が書かれ、それに修正を加えて「新発見書簡四十二與劉侍讀」が作られたのである(9)。そのことは、たとえば文章表現の違いから窺える。まず以下の部分の違いに着目したい。

「又(與劉侍讀)其二十六」

某集錄前古遺文、往往得人之難得、自三代以來、莫不皆有。獨無前漢時字、每以爲恨。

某、前古の遺文を集録し、往往にして人の得難きを得、三代より以來、皆有らざる莫し。獨だ前漢時の字のみ無く、毎に以て恨みと爲す

「新発見書簡四十二與劉侍讀」

脩所集錄前古遺蹟、自三代以來、往往有之、獨無前漢時字、常以爲恨。

脩、集録する所の前古の遺蹟、三代より以來、往往

にして之れ有り、獨だ前漢時の字のみ無く、常に以て恨みと爲す。

この部分、「新発見書簡四十二與劉侍讀」の方が字数が少なく簡潔な表現になっている。「又(與劉侍讀)其二十六」では「私は前古の遺文を収録し、往々にして人が入手するのが難しいものを入手し、三代以來入手していないものはない。ただ前漢の時代の作だけがなく、常に恨みに思っている」となり、一方「新発見書簡四十二與劉侍讀」では「私が集めた前古の遺蹟については、三代以來往々にして入手しているが、ただ前漢の時代の作だけがなく、常に恨みに思っている」となり、「新発見書簡四十二與劉侍讀」の方が文章が引き締まり、その表現が簡潔になっている。歐陽脩はこれらの書簡を修正するに当たり、文章表現をより簡潔にしたと思われる。しかも、「又(與劉侍讀)其二十六」では、歐陽脩が手に入れた遺物の一つが「漢博山槃記」と記載されているが、「新発見書簡四十二與劉侍讀」では「蓮勺博山槃記」となっており、「漢」という漠然とした記述から「蓮勺」という地名に変更されている。当初「漢」ということはわかっていたが、その後具体的に検証した結果、「蓮勺」という地名が判明し修正を施したと言える。つまり、この二つの書簡は、「又(與劉侍讀)其二十六」から「新発見書簡四十二與劉侍讀」へと内容や文章表現が深化しているので、「又(與劉侍讀)其二十六」が先に作成されて、最終的に「新発見書簡四十二與劉侍讀」が出来上がったと考えられるのである。更に、「又(與劉侍讀)其二十六」には宛名はないが、「新発見書簡四十二與劉侍讀」には文章の最後に相手の宛名「原甫安撫學士坐前。廿一日 謹空」が記載されているということから、「新発見書簡四十二與劉侍讀」が実際に相手に送られた書簡であり、宛名のない「又(與劉侍讀)其二十六」は先に作られた、いわゆる下書きだったと考えられる。「又(與劉侍讀)其二十六」は、相手に送られることなく歐陽脩家に残され、代々伝わることとなった。そのことが端的に窺えるのは、「新発見書簡四十二與劉侍讀」において、歐陽脩が自らのことを「脩」と言っているのに対して、「又(與劉侍讀)其二十六」では諱を避けて「某」と記載されているということである。「某」を用いることについて、范志新『避諱学』には「今案：書某避諱・其例亦古。尚書已啓其端」とあり(10)、古代の祭法では父祖の諱を避けて「某」を用いたのであり、「又(與劉侍讀)其二十六」に「某」と記載されていたことは、それが歐陽脩の子孫の家に残されていた資料であることを物語っている。つまり、この二通の書簡は、「又(與劉侍讀)其二十六」に、歐陽脩が修正を加えて「新発見書簡四十二與劉侍讀」を作成して、

それを相手に送付した。先に作成されていた下書きの「又(與劉侍讀)其二十六」は相手に送られることはなかったため、歐陽脩の家に残されて代々伝わり、後に周必大がそれを見つけ出して全集に収録したのであった。このように、書簡の具体的修正例が窺えることから見ても、歐陽脩は書簡を作成するに当たってしばしば修正を行っていたのは間違いのないであろう。

以上、歐陽脩は『居士集』を編纂した際に自己の作に何度も修正を重ねたこと、また書簡にも修正を施すことを厭わなかったこと、更に『居士集』には「文史を論じ、古事を問ふ」内容を持つ書簡が収録されていること、これらを考え合わせると、『居士集』に収録された書簡は、はじめから季節の挨拶や気候の記述がないものもあったかも知れないが、その大部分は歐陽脩が『居士集』を編纂する際に、選録した書簡に修正を加え、その過程で季節や気候等に関する記述を削除したと考える方が自然ではないだろうか。

五、おわりに

南宋の沈作喆『寓簡』巻八の次のように記述する。

歐陽公晩年、嘗自竄定平生所爲文、用思甚苦。其夫人止之曰、何自苦如此。當畏先生嗔耶。公笑曰、不畏先生嗔、却怕後生笑。

歐陽公は晩年、嘗に自ら平生爲りし所の文を竄定するに、思ひを用ふること甚だ苦しむ。其の夫人之れを止めて曰く、何ぞ自ら苦しむこと此の如きか。當に先生の嗔りを畏るべきかと。公笑ひて曰く、先生の嗔りを恐れず、却て後生に笑はるるを怕ると。

歐陽脩は死ぬ直前まで自己の詩文集『居士集』五十巻を編纂し、文章の修改や作品の確定を行っていた。それを見かねた夫人が、どうしてそのように苦しんでまで編纂をしているのかと尋ねたところ、後世の物笑いにならぬようにと歐陽脩は答えた。このように自分の作を後世にしっかりと伝えることを意識して編纂した『居士集』に、歐陽脩は書簡のうち「文史を論じ、古事を問ふ」内容が表れた作を収録しようとし、自らの多くの書簡の中から代表作を選びすぎたと考えられる。更に、それらの書簡に自らの意見や見解が明確に表われるように内容や表現に修正を施したのではないだろうか。意見や見解が表れた代表作に仕上げるためには、歐陽脩は自らの議論とは無関係な季節の挨拶や気候等の記載はもはや不要なものを見なして削除したと考えられる。

このような経緯を踏まえると、『居士集』収録の書簡が『啓劄青錢』に見られる宋代当時の正式な書簡の書き方とは全く異なるのも首肯できる。つまり、『居士集』に収録された書簡は分類は書簡ではあるが、歐陽脩の意識の中では、正式な格式張った書簡や日常の些細な個人的出来事を述べた書簡ではなく、後世に残すべき自己の見解や意見を表出した代表的「作品」だったのである。

注

- (1) 歐陽脩の作品の後に括弧で示す詩文集名と巻数は、本稿第四章で指摘するように歐陽脩の全集『歐陽文忠公集』を構成する詩文集名とそれに収録されている巻数である。
- (2) 歐陽脩の書簡は、周必大が南宋時代に『歐陽文忠公集』を編纂した際に、その中に収録されて今日に伝わる。歐陽脩の新発見書簡九十六篇は、周必大が全集を編纂した後に見つけられ、その後何回か増補された際に全集に収録されたと思われる。このように、新発見書簡九十六篇は従来伝わってきた書簡と収録された過程が異なっている。なお、筆者はこの歐陽脩の新発見書簡九十六篇について、2011年10月に日本中国学会大会で報告した。更に、九十六篇は拙著『歐陽脩新発見書簡九十六篇－歐陽脩全集の研究－』(研文出版、二〇一三年)に掲載しているので参照されたい。
- (3) これに加えて、歐陽脩の全集を構成する『表奏書啓四六集』に書として六十九篇、啓として二十篇が収録されている。これらは書簡と考えられるので、歐陽脩の書簡として合計すると六百九十三篇の書簡が今日に伝わっていることになる。ただし『表奏書啓四六集』に収録されている書啓については、歐陽脩が様々な官職に就いていた時に、その立場に基づいて作成されたものも多く、記述に様々な制約があるので、本稿では考察の対象外とした。また『内制集』にも書簡が収録されているが、それらは歐陽脩が翰林学士をつとめ、皇帝のために制作した書簡なので、これも考察の対象外とした。
- (4) 金文京『漢文と東アジア－訓読の文化圏』(岩波書店、二〇一〇年)二一四頁の記述。
- (5) この部分の記述は、拙稿「書簡よりみた周必大の『歐陽文忠公集』編纂について」(『日本宋代文学学会報』第一集、二〇一五年)に基づいている。本稿は、この拙稿を踏まえて作成したので、記述が重複する箇所があることをご了解いただきたい。
- (6) 歐陽脩が病気がちであったことは、小林義廣「歐陽脩の生平と疾病」(『東海史学』二十四、一九九〇年、後

- に『歐陽脩 その生涯と宗族』(創文社、二〇〇〇年)に収録)に詳しい。
- (7)『居士集』には書簡が十篇収録されているが、そのうち二篇は皇帝に送った上書なので、本稿では考察の対象外とした。
- (8)注(5)拙稿参照。
- (9)本稿における「又(與劉侍讀)其二十六」と「新発見書簡四十二與劉侍讀」の比較考察については、拙稿「歐陽脩新発見書簡の特色について－新発見書簡35「又(與孫威敏公)」、42「與劉侍讀」、69「與杜郎中」、70「又(與杜郎中)」四篇と通行本書簡との内容重複に着目して-」(『比較社会文化』第19号、二〇一三年、のち拙著『歐陽脩新発見書簡九十六篇－歐陽脩全集の研究－』(研文出版、二〇一三年)に収録)に基づいた。
- (10)范志新『避諱学』(台湾学生書局、二〇〇六年)一〇五頁の記述。

(附記) 本稿は、2015年5月30日に東洋大学で開催された、東洋大学「エコ・フィロソフィ学術研究イニシアティブ」主催シンポジウム「宋代の自然観」での発表報告に基づいており、JSPS科研費26284050の助成を受けたものです。

Seasonal Words of Greeting Observed in the Letters of Ouyang Xiu

Hidetoshi HIGASHI

Abstract

This study focuses on Northern Sung Dynasty writer Ouyang Xiu's use of seasonal words of greeting and climatic descriptions in his letters. Ouyang Xiu often mentioned the season or climate in his poems and essays. Likewise, his many letters that survive to this day contain seasonal words of greeting and remarks about changes in the climate. Yet, in the letters compiled for the *JuShiJi*, which he personally edited, descriptions concerned with seasonal words of greeting and climate are not entered at all. It is conjectured that at the time he compiled his letters for the *JuShiJi*, Ouyang Xiu deleted any description of weather and climate. The fact is that Ouyang Xiu often revised his letters. Since his own views and opinions appear in letters for the *JuShiJi*, we think that when Ouyang Xiu compiled the *JuShiJi*, he revised the letters so that the views and opinions he was passing along would be clear. Therefore, seasonal words of greeting and references to climate, which were unrelated to his views and opinions, were deleted. For Ouyang Xiu, the *JuShiJi* was not a compilation of mere letters, but rather a "literary work" that expressed his personal views and opinions.